

フィールドワーク入門講義録 ——「フィールドワークとは何か」——

Lecture Notes for Introduction to Fieldwork

高原 隆

Takashi Takahara

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: Takashi@vega.aichi-u.ac.jp

「フィールドワーク」という言葉を聞いたことがない人が大半だと思う。このように話している本人がそもそもそういった者であったことを今でもはっきりと覚えている。私自身の「フィールドワーク」の始まりは、やはり皆さんと同じように学生時代にさかのぼる。ただし、その時、学部生活はすでに日本で終えており、アメリカで大学院生になってからのことであった。つまり、学部生の頃はフィールドワークが何なのかは知らなかったし、全く関心の外であった。

大学院生活は、アメリカ合衆国にあるニューヨーク州立大学オールバニー校で始まった。専攻は人類学であった。人類学部の大学院生になりながら、フィールドワークが何なのか知らなかった。その主な理由は学部生の時の専攻分野が人類学ではなく経済学であったためである。日本の大学院のように研究計画書の提出もなく、いきなり大学院で人類学の授業が始まり、授業の中のひとつで事件が起きた。そのコースの課題が「フィールドワークをする」だったのだ。フィールドワークについての説明はなかった。ただ単純明快に“Do it!”であった。先生の名前は忘れもしない Gary Gossen 教授である。知っているのが当然という態度であった。困った私はすでに友人となっていたアメリカ人の Dan (Daniel Peter Walsh) に相談し、フィールドワークについていろいろと教えてもらい、アドバイスを受けた。Dan も同じ人類学専攻の大学院生で、1年先輩に当たり、これを機にただの友人以上の友達になるのである。

いろいろ考えた末、選んだフィールドは Albany Senior Citizens' Center に決めた。それからしばらくして、電話で予約を取り、Gossen 教授に紹介状を書いてもらい、それを手にして直接 Center へ行ったのを覚えている。出てこられたのは Sister Mary であった。電話の話し相手であり、Center の責任者の一人でもあった。それからは時間があれば

Center へ通った。Center にいるアメリカの老人たちと急速に親しくなっていた。そしてやがて気がついた問題が、「なぜセンターの老人たちは、明るく、賑やかで、元気なのか」であった。アメリカは若者の国であり、若さが正義であり、老いることはマイナスというステレオタイプな考えが社会に広がっていたから、その現場での温度差に驚いたのである。これが発端になり、修士論文へと結実していった。研究テーマは「老いる」、「記憶」、「ジェンダー」、「ライフヒストリー」といったものを設定した。テーマ自体もフィールドワークと共に発展していった。Center の老人たちと私をつなぐ媒体は何がいいかといろいろ考え、行き着いた先が逸話 (Anecdotes) であった。あとは男女を問わず、親しくなっていた老人たちから彼らの逸話を次々と聴いていった。老人たちは個人で、またはグループで聞き取りやすい場を設けてくれて、こちらが日本から来た異人であるにもかかわらず、彼らの人生を語り始めたのだ。ただ普通に大学で学生生活を送っていれば、これほどの数の土地の人々と話しをする機会はなかったと思う。そう思い始めた時、「ああ、これがフィールドワークなのだ」と実感したのである。またフィールドワークが順調にいつていることは、Gossen 教授との対話からも感じられた。Gossen 教授の私を見る眼が変わったのだ。対話の場も教室から研究室へ、時には教授の家ということさえ起こり始めた。そのどちらも刺激的な場であった。

以上のことは実際は2年間にわたって続けられたことであるが、おおよその概略は理解できると思う。この Albany Senior Citizens' Center でのフィールドワークを皮切りに様々なフィールドワークをして今日に至っている。さて、フィールドワークとは何なのであろうか。自分自身の経験に照らして鑑みると、一言で言うと、「エスノグラフィー (ethnography) をする」になる。Gossen 先生が最初に言われた “Do it!” の “it” が “ethnography” であり、“Do it!” とは “Do ethnography!” ということになる。

では「フィールドワーク」はどこに行ったのだろうか。いきなり消えてしまったわけではない。フィールドワークが不要というわけでもない。新たに現れた “ethnography” に鍵が隠されている。研究社のリーダーズ英和辞典第3版(2012)を見ると “ethnography” とは「民族誌(学)((記述民族学))」と出る。また Longman Dictionary of Contemporary English 6th Edition(2014)によると “the scientific description of different races of people” と書かれている。どちらも名詞として説明しているが、人類学の現場では動詞的な意味合いが強い。つまり “ethnography” とは “do ethnography” であり、“do” とは「する」と「書く」を意味する。すなわち「民族誌をする」と「民族誌を書く」を一つにしたものが “do ethnography” ということになる。「民族誌をする」ということが一般に言う「フィールドワークをする」ことを意味する。現場(フィールド)に行き、フィールドワークをしながら、「民族誌」を徐々にイメージしながら、練り上げていく行程を経て、「民族誌を書く」ことになる。(マーネン 1999)

私自身、初めてのフィールドワークをしたのは、アメリカ合衆国ニューヨーク州オールバニー市にある Albany Senior Citizens' Center であった。フィールドがある同じ町に私は住んでいたのである。人口が 10 万人ほどの町で、ニューヨーク州の州都である。そこで日本人が一般にイメージするいわゆる「アメリカ人」、具体的にはオールバニー市民をフィールドワークしたことになる。さらに具体的には Albany Senior Citizens' Center にかよっている 65 歳以上の老人たちである。別の言葉で表現すると、民族誌の対象はいわゆる特殊な「xxxx 民族」ではなく、一般の人々、その土地に住んでいる人々を指している。逆に「xxxx 民族」は「その土地に住んでいる人々」に含まれると考えた方が良い。

この姿勢は今に至るまで変わっていない。ただ自分とは異なる世界に住む人たちで、何かある共通のファクターで繋がっている人々が民族誌が対象とする「民族」である。これは当然のことながら、日本を含む。あくまで“do ethnography”をする本人を基点にして、本人が判断することになる。つまり「私が行う他者の研究」を意味する。そして他者の研究は即、「私自身の研究」に反転する。鏡を見て、自らを確認することに極めて似ている。自分で自分自身のことを知ることは難しい。ところが「エスノグラフィーをする」ことによって、他者と私との違いに気づき始め、他者が鏡となり、私は「私」に気づき始めることになる。他者との対話が自己との対話を促すのだ。

フィールドに出てしばらくすると、「気づき」が始まる。一種のカルチャーショックともいえる。この気づきが目指す民族誌への出発点となっていく。Albany Senior Citizens' Center にかよい始めて、そこにいるかなり年配のアメリカ人たちに溶け込みながら浮かび上がってきた問いが、「なぜセンターの老人たちは明るく、賑やかで、元気なのか」であった。こういったことは実際にその場にいる人々と交わってみないとわからない。研究調査をする本人から、現場を経験せずに出てくる問いではない。こういった意味で、いわゆる社会学系の社会調査をする際に使われるデータの数量化を目指すアンケート調査（研究者が調べたい外なる問いを対象者に投げかける）、すなわち“questionnaire”とか“survey”とかは「エスノグラフィーをする」からは外れることになる。特に二つの点で問題になる。まず問いの立て方が「私（調査者ないし研究者）」中心である。そしてデータをとる対象となる母集団の特定がフィールドの外にいる限り、見極めることが難しい。この二つのずれが重なり合って、数値化され、グラフ化され、見た目には科学的なデータを無意味なものにしてしまう。アンケート調査は一見、屋外に出るという意味では屋内でする研究と比べるとフィールドワークに見えるかも知れないが、厳密な意味ではフィールドワークとは言えない。

また、当時（1980 年代）はなかったが、現在では情報収集におけるアプローチの仕方が格段に変化ないし進化してきている。携帯電話、スマートフォン、インターネット、

Facebook や Line, Twitter などの SNS は世界中で使われるようになり、空間を超えて、同時に世界中の人々と繋がる事が出来るようになってきている。またグーグルアースを使えば、住所が特定されると、その場所を別の場所からモニターを通してみることも出来る。アメリカのピッツバーグに住んでいる友人の家に行った時のことであった。グーグルアースを通して、日本にある私が住む豊橋の家を見た時は驚いたものである。私が乗る白の三菱のアウトランダーも映っていた。住所さえはっきりしていればフィールドに行かずにフィールドが見れるのだ。以前はいわゆる図書館を中心とした文献調査 (Library Work) が情報収集の主な手段であった。ところが情報収集の手段が発達するにつれ、フィールドに限りなく近づいてきており、情報伝達の同時化、空間の消滅、双方向化が地球規模で広がってきている。情報は加速度的に増加、変化することになり、ネット上には情報の海が広がり、増殖を続けている。情報の正否は問いにくくなる。状況が常に変化しており、その人の立ち位置によって、求める情報も変わり、情報の意味、そしてその価値すらも刻々と変わり、その人自身も変わっていく。

現在のフィールドワークはこうした地球規模の社会変化の中で行われる。しかしその基本的な特徴は 20 世紀初頭以来あまり変わっていない。フィールドで自らの身体を使いながら、日常生活を基本においた情報収集である。身体の手を動かして知る異文化に対する気づきからの学びを「エスノグラフィーをする」という。それは人と人が直接対面する、人間同士の信頼関係に基づいたコミュニケーションから生まれる。つまり「フィールドワークをする」と「エスノグラフィーを書く」がここにおいて再び顕在化してくることになる。情報収集は単に情報を出来るだけ多く、正確に集めることではない。情報を常に「選ぶ行為」がそこには伴っている。価値があるか、価値がないか、常に判断が情報収集では行われる。つまり、フィールドのその場、その場において、私は第一次解釈をすることになる。それをその場か、記憶が鮮明なうちに、フィールドノートに記録する。また日々日誌ないしは日記をつけ、私を含めたフィールドのコンテキストを記録しておくことが重要になる。

データが集まってくるとやがて「気づき」が「問い」の形になってフィールドで何をやるのかが形を成してくる。データの中に「気づき」の島の輪郭が見え始め、島宇宙のような独特な形を作り始めるのである。こうなると具体的な必要とするデータが頭に浮かび上がり、そのデータをさらに探しにフィールドに出かけ、データの集積が始まることになってゆく。ここまで来ると研究のテーマが大きな枠組みとして見えてくる。するとさらにそのデータを追うという作業をするのである。

フィールドノートにデータが十分に集まると、「エスノグラフィーを書く」ことに移る。その時機が 1 年後になるか、2 年後になるか、あるいは 5 年後、さらには 10 年後になるかは研究テーマの大きさによる。フィールドノートのデータは第一次解釈を通過した

結果であるから、エスノグラフィーを書く作業は解釈の解釈をすることを意味する。そして解釈に基づいた新しい情報の創造、すなわち「エスノグラフィーを書く」ことになる。「文化を書く」といっても良い。それは記号生成の場に自ら立つことを意味する。

フィールドワークとは何か

きわめて自己発見的な、他者の中に自己を見る、内省的な、作業である。フィールドワークを始める前、事前に具体的なフィールドを決める時、人は様々な要因や情報によって左右される。また本人の好奇心や興味が重要な基準となって働く。ひとたびフィールドを決定したら、フィールドへ行く事前準備が大事になってくる。集められる情報は手元に集める必要がある。しかし、その大部分は過去のものであり、他人が編集したある偏向性を持つものであることを認識しないとイケない。さらにこれから行こうとするフィールドはすでに変化しており、また今も変化しつつあることを理解することが重要である。そうした傾向ないし偏向が入っている情報に基づいて、フィールドワークの調査項目、目的などを設定するのは危険である。緩やかな方向性ほどにとどめておくことが大事である。

フィールドワークは外からの質問の確認に行く作業ではない。フィールドワークは出来るだけ中立な立場で（実際は本人が持っている常識や自己中心的な考えや感覚 — 自覚しがたいエスノセントリズム — からは逃れられない）入っていき、そこで出会うカルチャーショック的な「気づき」に気づき、内省的な問いに至ることが、内から見るフィールドに深く接近できる切っ掛けになる。誰に会うかも、どういった体験を現地の人とするのかも、一人一人違ってくるのがフィールドワークである。正しいフィールドワークも、間違ったフィールドワークもない。

フィールドワークをする本人が「エスノグラフィーをする」過程を通して、知らない他者と知らない自己に出会い、解釈を繰り返し、積み上げながら、「エスノグラフィーを書く」ことを通して、文化を創造する行為なのである。読者は構築された記号の網の目を通して、文化を垣間見るのである。まるで万華鏡を覗くように。

参考文献

- ジョン・ヴァン＝マーネン 1999年 フィールドワークの物語 エスノグラフィーの文章作法 現代書館
高橋作太郎編集代表 2012年 リーダーズ英和辞典第3版 研究社
Karen Cleveland Marwick, etc. Ed. 2014. Longman Dictionary of Contemporary English 6th Edition. Pearson Education Limited.